

先週私たちは、コリントにおけるパウロの宣教の続きと、その後彼がエペソに立ち寄ってから、シリアへと向かったことを見ました。そのようにしてパウロの第二回宣教旅行は、彼がアンテオケ教会に戻ることで終わりを遂げたわけですが、そこにしばらく滞在してから、再びパウロは出発します。そして、ガラテヤの地方およびフルギヤを巡り、すべての弟子たちを力づけるのです。第三回宣教旅行の始まりです。

今日もその続きを見ていきますが、この18章24節から19章にかけては、エペソでの宣教について記されています。まず18章の残りの部分では、アポロという人の働きについて、そして19章からは、パウロの働きについてです。前の地図を見て下さい。エペソは、アジアで最も大きな町で、政治的に重要な位置を占め、陸海にわたる交通と商業の重要な所として知られていました。文化的にも歴史が古く、諸宗教の活動も盛んでした。古代世界の七不思議の一つと言われていたアルテミス神殿もこの町にありました。ですから、アジアにおける宣教の戦略上からも、エペソは、最も重要視されるべき都市であったのです。

ところが、先週見たように、そこでの宣教の扉が開かれたように思える中で、パウロはそこを去りました。「神のみこころなら、またあなたがたのところに帰って来ます」と人々に告げ、シリアへと向かったのです。それは、その時パウロのうちに、エペソに留まることではなく、シリアに行くことが御心として示されていたからです。ただ、その前にも、主はパウロたちがアジアでみことばを語ろうとした時、聖霊によってそれを禁じられましたので、見方によっては、主がエペソでの宣教を避けておられるか、まるで後回しにしているかのようにも思えないわけではありません。

でも、そうではありません。主イエスは、すべての人のために十字架にかかって死なれたとあるように、主は、すべての人が福音を聞き、信じて救われるためにご計画のうちに働いておられるのです。ですから、パウロがエペソを去った後、そこにはプリスキラとアクラが残っていたわけですが、主はアポロを遣わされます。そして、アポロがそこを去った後は、パウロを遣わされるのです。それは実に、彼らを通して主の福音がエペソの人々に語られるため、聞いて信じる者が、みな主の恵みによって救われるためでした。

24-26節「さて、アレキサンドリヤの生まれで、雄弁なアポロというユダヤ人がエペソに来了。彼は聖書に通じていた。25 この人は、主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかった。26 彼は会堂で大胆に話し始めた。それを聞いていたプリスキラとアクラは、彼を招き入れて、神の道をもっと正確に彼に説明した」。

アレキサンドリヤとは、エジプト北岸にある港町のことで、早くから多くのユダヤ人がここに住み、当時は、ギリシャのアテネと並んで二大学問都市、またキリキヤのタルソを加えた場合は、三大学問都市の一つとして広く知られていました。紀元前二世紀頃には、ここで旧約聖書が「70人訳」と呼ばれるギリシャ語に訳されます。ですから、その出身のアポロが、聖書に通じ、また雄弁であったこともうなずけます。

ところが、そのアポロは「ヨハネのバプテスマ」しか知らなかった。ヨハネのバプテスマとは、バプテスマのヨハネの説いた「罪の悔い改めのバプテスマ」のことですが、つまり、アポロは、イエスのことを正確に語りつつも、主が十字架で成し遂げられた贖いについて、また主がよみがえられ、天に昇られることで、弟子たちに聖霊を注がれ、そこから教会が誕生し、主の福音がエルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てまで広がっている、ということを知らなかったようです。

ですから、そのアポロが会堂で語るのを聞いたプリスキラとアクラは、彼を招いて、神の道をもっと正確に説明するのです。そこで彼らが今語った事柄について説明したことを私たちとしては期待するわけですが、残念ながらその内容は記されていません。またこの時、アポロが会堂で語ることで、信仰に導かれた人がいたかどうかはわからないのです。ただこの時アポロは、アカヤ、つまり、コリントに行くことを願っていました。ですから、その弟子たちは、コリントの兄弟たちに推薦の手紙を書いて、アポロを送り出すのです。

27-28 節「そして、アポロがアカヤへ渡りたいと思っていたので、兄弟たちは彼を励まし、その弟子たちに、彼を歓迎してくれるようにと手紙を書いた。彼はそこに着くと、すでに恵みによって信者になっていた人たちを大いに助けた。28 彼は聖書によって、イエスがキリストであることを証明して、力強く、公然とユダヤ人たちを論破したからである」。

コリント人への手紙を見ると、コリントでのアポロの働きが、いかに大きな影響を与えたかがわかります。パウロは、その中で「私が植えて、アポロが水を注ぎました」（I コリ 3:6）と言うことで、自分がみことばの種を蒔いたコリント教会に、アポロが霊的な水分、つまり、みことばによる養いをしたことを語っています。また、それゆえに、「私はアポロにつく」という人々もいたようです。そのことを憂慮してか、その後、アポロはコリントを離れ、エペソに戻りますが、彼はパウロの要請に対して、少なくとも「その時」は、コリントに行くつもりがないことが、手紙の最後の章に記されています（I コリ 16:12 参照）。

話を戻しますが、アポロがコリントに行った後、今度は、パウロがエペソにやってきます。そして、その弟子たちに出会うのです。彼らが、アポロを通して信仰に導かれた人かはわかりません。ただ彼らもまた「ヨハネのバプテスマしか知らなかった」という点からして、アポロのように、主イエスとその救いについて正確な情報をもっていなかったと言えるでしょう。そのことに気づいたパウロは彼らにこう尋ねるのです。

19 章 1-4 節「アポロがコリントにいた間に、パウロは奥地を通ってエペソに来た。そして幾人かの弟子に出会って、2 『信じたとき、聖霊を受けましたか』と尋ねると、彼らは、「いいえ、聖霊の与えられることは、聞きもしませんでした」と答えた。3 『では、どんなバプテスマを受けたのですか』と言うと、『ヨハネのバプテスマです』と答えた。4 そこで、パウロは、『ヨハネは、自分のあとに来られるイエスを信じるように人々に告げて、悔い改めのバプテスマを授けたのです』と言った」。

ヨハネのバプテスマしか知らない彼らに対するパウロの説明が、「主の御名によるバプテスマ（もしくは、聖霊のバプテスマ）を受けなさい」というものではなく、「ヨハネは、自分のあとに来られるイエスを信じるように人々に告げて、悔い改めのバプテスマを授けたのです」というものからして、彼らはやはり、主イエスとその救いについて知らなかったのでしょうか。ですから、バプテスマのヨハネの弟子の域であったといえます。

でも、パウロのいうように、ヨハネの教えが、彼のあとに来られた主イエスを信じることであったのを知った時、彼らは、パウロを通して主イエスの御名によるバプテスマを受けます。そして、6-7 節が続くのです。「パウロが彼らの上に手を置いたとき、聖霊が彼らに臨まれ、彼らは異言を語ったり、預言をしたりした。7 その人々は、みなで十二人ほどであった」。

この使徒の働きのメッセージシリーズを始めて、すでに一年以上が経ちました。私たちは、その初めの頃から、聖霊について記されていることを見てきたわけですが、いかがですか？ここには「私は聖霊の与えられることを聞いたことはありません」という方はおられないと思います。でも、もしそうであるなら、ここでパウロが尋ねたように、「あなたは信じたとき、聖霊を受けましたか？」「自分が受けた洗礼が、ヨハネのバプテスマか、主イエスの御名によるバプテスマかわかりません」という人はいませんか？

時代や場所の違いからして、私たちのまわりでは、「ヨハネのバプテスマを受けました」という人は、おそらくいないことでしょう。ということは、ここにいる信仰者はみな、聖霊の与えられることを聞き、また実際に、主イエスを信じ、その御名によるバプテスマを受けたことで聖霊を受けた、ということになりますが、あなたは、そのように主の福音を理解しておられますか？そして、この救いに預かっている者、すでに聖霊を受けている者として、あなたは聖霊に導かれて歩んでおられますか？

もしそれが、ヨハネのバプテスマでも、主イエスの御名によるバプテスマでも、どちらでも良いものであったのなら、パウロは、この弟子たちに、主の御名によるバプテスマを授けることはしなかったことでしょう。でも、そうしたということは、そのことなしに、主の福音、その救いは十分ではないということになります。主イエスを信じて救われる者にとって、聖霊を受けることは、なくてはならないものだからです。

でも果たして、どれだけの人が、そのことを救いの正確さとして理解し、そのことを語っているのでしょうか？ また、そのことを信じるゆえに、日々聖霊により頼むことで、主を信じない人とは違った生き方をしていますか？ あなたはその人ですか？ 聖霊の与えられることを信じ、聖霊により頼むことがなくても、自分は主イエスを信じている、という人はいることでしょう。でも、それは聖書からすると（いや、少なくとも今日の箇所からすると）、ヨハネのバプテスマしか知らない人々と同じではないですか？

つまり、罪の悔い改めとして、自分が罪人であることは認め、神様に謝罪することはしても、でも肝心のその罪から救って下さる主イエスのことを知らない、彼によって与えられている救いのすばらしさを知らない、ということにはならないですか？ そうすると、本当は救われているはず、もっと言うと、神の子どもとして光の中を歩んでいるはずなのに、でも実のところ、その心においては、救いの確信がなく、また歩みにおいても、力のないものになってしまう、ということが起こるのです。

でもそれでは、聖書を通して神様が約束しておられる救いを正確に表しているとは言えません。パウロの言うように、ヨハネが悔い改めのバプテスマを受けたのは、彼の後に来られた主イエスを人々が信じるため、信じて約束の御霊、助け主を主から受けるためだからです。ですから、主イエスを信じるなら、聖霊は与えられます。聖霊は、主ご自身の霊だからです。今主は、私たちの目に見える形で、肉体をもってここにはおられません。でも聖霊を通して、信じる者のうちに住んで下さることで、主はともにおられるのです。

ですから、救いは、バプテスマによるのではなく、主イエスによります。主イエスへの信仰によって、その救いの保証として、主は聖霊を与えて下さるのです。私たちがバプテスマを受けるのは、公に主への信仰を言い表すため、また私たち自身、主イエスと一つにされていることを覚えるためです。私たちは、水の中に浸ることで、自分の罪のために十字架にかかり、贖いの死を遂げて下さった主とともに死に、そこから出ることで、死よりよみがえられた復活の主のいのちに預かっている、という信仰に立つのです。

いかがですか？ あなたは主イエスを信じていますか？ 自分が罪人であると認めるだけでなく、そこから救って下さる主イエスを信じて、彼につくバプテスマを受けられましたか？ もしその答えが「はい」であるなら、聖霊はすでに与えられている、という信仰に立って下さい。そして、聖霊がさらにあなたの心の目を開き、主イエスとその栄光をわからせて下さるように祈り求めてほしいのです。なぜなら、それこそ、主が信じる者に聖霊を与えて下さる理由だからです。聖霊を通して、すべての人が主イエスを主と告白し、父なる神様をほめたたえるようになるためです。聖霊なしに、初代教会の歩みが語れないように、聖霊なしに、私たちの救いも、主の恵みに押し出された信仰の歩みもあり得ません。聖霊なる神に導かれようではありませんか。